船大工の技術が大川家具の誕生を導いた

日吉神社の船神輿（ふなみこし）　昭和38年　県指定有形民俗文化財

庄分の船大工が伝統技術を生かして建造、奉納したもの。長さ9.3メートル、中央幅２メートル、高さ３メートル、杉材で船体は漆塗（うるしぬ）り、釘（くぎ）は使用せず、組立式、底部に四輪の木車を取付け曳行（えいこう）できる。日吉神社の船曳きに使用されてきた。

大川家具を生んだ榎津町

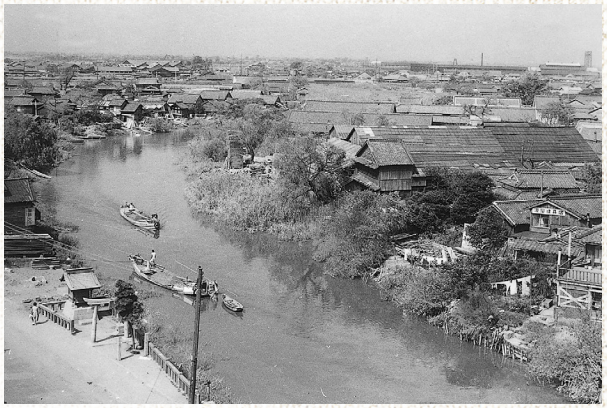
大川家具は、昭和20年代まで榎津指物、または榎津モン（物）と呼ばれていました。

なぜでしょうか？それは大川で造られていた木工製品は、榎津町の庄分を中心として造られていたからです。

大川家具産地の成立は、種々な伝承や説があって今までよく分かりませんでしたが、全国の家具産地の研究がすすみ、有名な家具産地が成立した理由として４つの条件が挙げられています。

１、船大工が住みついた所、大川、徳島、新潟、酒田（山形県）
２、城郭、社寺建築のため指物師が集まった所、静岡、広島、鳥取、高松
３、木材の生産地であった所、日田、和歌山、高山（岐阜県）、長野、加茂（新潟県）、府中（広島県）
４、木材の集散地①であった所、荒川（東京）、西区（大阪府）を挙げています。（昭50年九州経済白書）

さらに大川は、九州電力夜明ダム完成以前（昭和29）は、筏流しで、日田木材の運搬が便利であったことも挙げています。


現明治橋南　小船が見える

船大工の高度な木工技術と木材の集散地ということから榎津指物が誕生したわけです。

では、指物と家具はどう違うのでしょうか「指物」とは、木の板を指し合わせて組立ててつくった器具、箱、机、タンス、などで、昔からの一つの木工技術のことです。

江戸指物、京指物などがいい例です。

家具というのは、日常の衣・食・住のための道具のことで非常に範囲が広くなります。

大川では、木工製品の形態から、箱物（タンス、食器棚）、脚物（机、テーブル）と呼んでいます。また、最近では、インテリア製品とも呼んでいます。インテリアは英語で室内、家屋内という意味です。

“インテリア・シティー大川”というのは、家具産地の街、大川という意味になります。

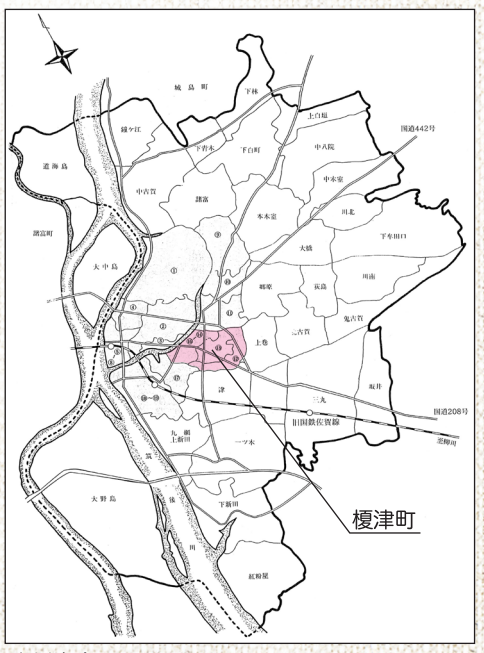
船大工の町　榎津庄分

ではなぜ榎津町は、船大工の町になっていったのでしょうか？

それは、榎津は筑後一の港で、対岸の現諸富町寺井と相対し、肥前（佐賀）へ渡る渡船場でした。

現在、明治橋一体は、船影もなく港の面影を見ることは出来ません。しかし、江戸の中期頃まで、花宗川の川幅は現在よりも広く、約70メートルくらいで、筑後川の本流も寺井の方へ流れていました。久留米藩の記録に、「榎津入江、長サ28町、広サ28間」とありますが、現代語になおしますと、花宗川は長さが2.8キロ、広さは68.4メートルということになります。

また、花宗川のことを、「榎津江湖」ともいっていましたが、江湖②という言葉は、筑後川河口一帯しか使用しない言葉で、海水が流入してくる入江ということです。



大川市全図

有明海の海水は、満潮（上げ潮）に乗じて久留米市の金丸川近くまでさか上ります。それで、有明海を航行する船は満潮と引き潮を利用して航行していました。

ところが、筑後川は浅いので、海上交通の大船が航行できるのは、榎津一帯までです。

それで、海船は、積荷を小船に替え、上流の久留米の瀬下まで運んだものです。

それで、榎津は有明海と筑後川を航行する船が集中する所でした。

ここに、船を修理したり、船造りをする船大工が必要となったのです。

また、江戸時代の交通は、物は船、人は馬が運んでいました。

それで、図のように、榎津には、古くから対岸の肥前に至る２つの古道が通じていました。一つは、久留米から榎津・小保に至り柳川から肥後に至る肥後街道③、二つは、榎津から中原～郷原に至り、現筑後市から八女の福島に至る福島往還④です。

この二つの古道は、榎津と寺井の渡船場を通して、肥後（熊本）と筑後と肥前（佐賀）を結んでいました。

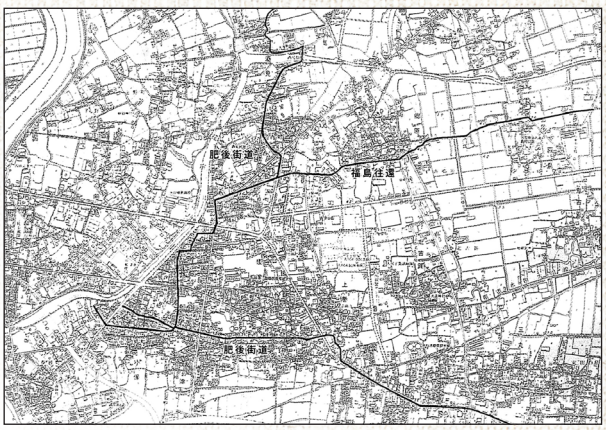
当時の榎津の渡船場の位置は、明治橋から榎津庄分の日吉神社一帯と推定されます。

後で、榎津の渡しより小保の渡しが重要となりますが、小保の渡しは、小保の渡辺材木店近くに位置していました。

関ヶ原合戦と藩境いの町の成立

天正15年（1587）秀吉が九州を平定しますと、筑後地方は、久留米城を毛利秀包、柳川城を立花宗茂が治めることになります。それで、現大川市は、立花宗茂の支配下になりました。

ところが、天下分目の戦いといわれました関ヶ原の役（慶長５年、1600）に、毛利氏も立花氏も、西軍に加担したことから改易（領地没収）され、慶長６年（1601）岡崎城主（愛知県）の田中吉政が筑後一国36万石を支配することになります。



現在の大川市域の肥後街道

田中家が筑後を支配したのは、20年間でしたが、田中吉政という人は数々の土木工事の事績を残しています。

大川では、道海島と潟島（現三又の川端）の開拓は、中古賀（三又）の緒方将監、大野島は津村三郎左衛門の開拓として知られていますが、吉政の筑後入国で始められたものです。

慶長７年（1602）現みやま市鷹尾より大川市の北酒見まで30キロに及ぶ堤防の改修工事を三日間で完成しています。この堤防は“慶長の本土居”として有名です。昔からの小堤防を、三潴、山門、八女地方から大動員をかけて完成しました。

この堤防の完成後、堤防の外側に川口地区の紅粉屋、安本、小保の浜口が開拓されましたので、現大川市の骨格は、田中吉政によって完成されたといえます。

また、吉政は、榎津の船大工に対し貴重な資料を残しています。

榎津船大工の伝右衛門という人が所持していた文書ですが、榎津村の蔵人と仁右衛門の二名の大工宛、田中吉政が当時の税金を取締る役目の者（小物成奉行）に出した書状に、この二名の船大工は、中村権左衛門の仕事をしている者であるから、世帯と家屋にかかる税を免除せよという内容のものです。

昔の輸送手段は、物は船、人は馬でしたから、船大工がいかに大事にされたかという貴重な文書で、時代は慶長10年（1605）10月20日で、吉政の印が打ってあります。

今から409年前の「榎津船大工に関する」一番古い記録となります。

この資料は、大川の木工業の歴史の中で、見落とすことの出来ない資料です。このように、田中家は、数々の土木工事や、貴重な船大工の資料を残していますが、残念ながら、跡継ぎがないことから田中家は、お取りつぶし（改易）になりました。そして奥州棚倉郡で三万石の藩主になっていた立花

柳川領小保町と久留米領榎津町の御境石
馬継所にも利用され、馬10匹が小保と柳川を往来していました。

宗茂が再び柳川藩主となり、筑後南部10万9000石を拝領しました。

翌年の元和７年（1621）丹波福知山藩主の有馬豊氏が筑後北部の久留米藩21万石の藩主となりました。

さらに、立花宗茂の甥高橋種次が三池藩一万石の藩主となりました。

この筑後３藩の成立で、現在の大川市は、大川校区の小保町、川口校区全域、大野島校区全域、田口校区の幡保が柳川藩に、これ以外の地域が久留米藩となりました。

この頃から榎津と小保は、村から町となりこの二つの町中に藩境線が引かれましたので全国でもめずらしい藩境の町が成立しました。

写真は、久留米藩と柳川藩の境石で、中央の穴に丸太を通し、馬継所⑤も兼ていました。

（小保町の古老のお話）

コラム

榎津庄分には、大正末期頃まで、周防屋、肥後屋、薩摩屋、肥前屋、岩国屋、二見屋、玉島屋、五島屋といった屋号の船大工職が十数軒あり、それぞれ違った型の木造船を造っていました。また、それぞれの船の修理も造船元で請負っていました。

これ等の船大工職は、全て「志岐姓」を名乗り、天草郡志岐兵部入道麟泉の家臣の流れという志岐家の家伝があります。

この日吉神社の船神輿は、安永３年（1774）に、庄分の船大工の方達が製造し、同年に奉納したものといわれています。

日吉神社の船神輿

長さ9.2メートル幅２メートル高さ３メートルで杉材を使用し漆塗りです。釘一本も使用されず組立式になっていて底部には四輪の車を取り付けた船引きが出来ます。昭和38年、福岡県指定文化財に指定されました。

庄分の志岐姓を名乗る方達が、天草から榎津に移住されたのは、次のようなことによります。天正15年（1587）秀吉の九州平定で、家臣の小西行長は、肥後国の一部24万石を拝領し、宇土城（熊本県）を修理することになりました。天正17年（1589）行長は、天草の志岐の城主、志岐兵部入道麟泉に、城の補修に参加せよと命じました。すると麟泉は、秀吉殿の命令なら従うが、小西殿の私的な命令には、従う道理はないと返答します。その結果、志岐麟泉と小西行長の戦いが始まりました。志岐氏は奮戦しましたが、小西行長は秀吉の家臣ですから、薩摩藩主、島津義弘の仲介で休戦となり、志岐氏は城を明け渡しました。これより志岐一門は各地へ移住しますが、高度の木造技術がありました。その一部の人達が榎津の庄分に移り住み、船大工を始めたというのが、志岐家の代々の家伝となっています。

明治十年代、榎津の志岐姓は、39戸になっていますが、内庄分だけで28戸になります。

そして、天明年間（1781～1789）久留米藩の御船大工棟梁に、志岐平右衛門、弘化年間（1844～）志岐嘉右衛門と代々志岐姓を名乗っています。

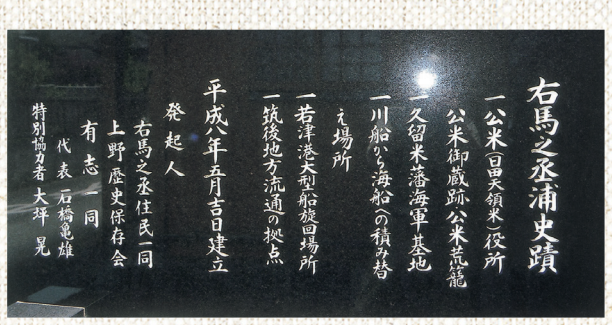
志岐氏が榎津に移住した頃の領主は、天正15年（1587）柳川城に入った立花宗茂です。

この３年前、酒見や榎津は、肥前（佐賀）の龍造寺対、豊後（大分）の大友氏の戦にて一面焼野原になっています。

志岐氏が城を明け渡したのは、天正17年頃（1589）のことです。志岐一門の方達は、焼野原となった酒見・榎津の復興のため榎津に来住したのでしょうか？志岐氏はなぜ榎津に移住したのでしょうか。今後の研究課題です。榎津庄分では、昔から、五月になると日吉神社の船曳祭りが開催されていましたが昭和40年代で中止となっています。

長崎市の榎津町では、日吉神社の船神輿と同じ型の船が保存されていますが、２年に１回、船曳きが開催されています。

浦役・船役の町　榎津



榎津町の浦役の記録　向島上野地区に建立

久留米領内で、榎津、北酒見、南酒見、住吉（久留米市）を４ヶ浦といい榎津町は、船役も兼ねていました。

「浦」というのは、海辺、または、水際のことです。また、北酒見、南酒見は、明治９年から合併して酒見になっています。

浦役とは、中世から近世に浜方（海辺）の百姓に課せられた役負担のことで、久留米藩の難破船の救助、荷物運搬（主として米）の役割をする村や町のことです。

例えば、久留米藩は、幕府の日田天領⑥の米を、長崎まで輸送する役目を課せられていました。向島の右馬之丞に、御米倉がありましたが、この米の輸送は、榎津町の役割でした。

また、久留米藩主が江戸や大阪へ行くのに船を利用される時は、榎津町から水主を出していました。浦水主といい55名が当られていました。（時代により変化している）

その替り、漁業権が認められ、漁業運上という税が課せられ、次のような漁介（貝）を久留米藩に納めていました。

海茸、海月、タイラギ（平貝）、アゲマキ、大鰻、ウチガキ（蛎）の６品です。

後で、銀で納めるようになります。金に直しますと約215両余になります。

その税額は、榎津と酒見で８割を占めています。つまり、榎津・酒見は、古くから漁業を営んでいましたから、船と船大工が江戸期以前の中世期から必要でした。

では、榎津町の船大工の数ですが、最近、新しい資料が見つかり、次のようになります。

・天明８年（1788）、船大工67、大工２
・嘉永７年（1854）、船大工101、大工41、以上は榎津町

南酒見に家大工33、北酒見４、向島に５となり、船大工は榎津町で占められ、嘉永年間に家大工が酒見、向島で生業を営んでいます、天明期に氏名と税額、嘉永期になると、氏名、年令まで分っています。この様な船大工、家大工の資料が大川に残っています。

このように、浦役、船役を課せられた榎津町は、久留米領内で、若津港が出来る前までは、筑後１の港町に成長していきます。

江戸の中期になると、戸数462軒、人口2,141人、船数は、220艘を数えます。

この内、119艘は商船、81艘は艀船⑦、８艘は貝取船、２艘は渡し船で、船頭数は40を数えます。まさに、榎津町は海に生きる町で、寛政年間（1789～1801）風浪宮の絵馬堂⑧に23艘の船の絵が奉納されていました。

風浪宮絵馬堂　寛政年中(1789～1801)
23艘の船絵が奉納されていたという。

踏車(水車)の使用が始まり
榎津から酒見へ広がった大工職

榎津町は高度の木工技術を有する船大工の町ですから、木工製品は、注文があれば何でも造っていました。

例えば、江戸中期（宝暦年間）には、船大工職で家を造る者が、それに応じた税を納め、家大工で船を造る者もまた同じ。といった記録があります。

船以外の木工製品の製造は、記録としては踏車（水車）の製造が安永６年（1777）から始まっているようです。

実は、佐賀県牛津町、野田家の日記に、「安永３年、この年以来より水車始ル、以前は釣桶かっほうなり」とい

う記録があります。

野田家は、牛津町で、質屋、酒造、ロウ（蝋）の製造を営んだ商家で、榎津で大桶の注文などの記録もあります。つまり筑後より佐賀の方が３年前から始用されていますが、「釣り桶かっほう」とはなんのことでしょうか。

筑後平野や佐賀平野には、無数の堀が縦横に掘めぐらされています。

クリークともいっていますが、クリーク（creek）というのは、英語で小川より小さい流れ、という意味で、昭和初期頃から使用されています。筑後地方で昔、流れ堀といって常に流れていた堀と似ています。

打桶による給水

本当は、堀が正しく農業用水の溜池のことです。筑後平野や佐賀平野は農業用水が不足しますから、無数の堀を掘って貯水し、不用になったら筑後川に水を落とします。

つまり貯水と排水の役割、昔は飲料水にも使用していました。

ところが、両平野とも、田面より水面が低く、昔から図のように桶に綱をつけ、両方から桶を堀に仕込んで、田に水を入れていました。これを佐賀の牛津地方では、「釣桶かっほう」といったようで、筑後では、打桶といっていました。

大変な重労働で、一日に40アール（４反）しか水を供給出来なかったそうです。

それで、現大木町の桶師で、猪口万右衛門という人が、万右衛門宅に宿泊した摂州商人（大阪と兵庫県の一部）から淀川の水車のことを聞き、苦心の末踏車（水車）を完成させたそうです。榎津の大工職に製造を委託（頼む）したという説もありますが、はっきりしていませんが、榎津で製造されるようになり性能が高いことから、榎津は踏車の産地になっていきました。万右衛門車を使用しますと１日に２人で１町６反余の田に水を入れることが出来ました。（打桶の４倍の能力）踏車は、大正末期からの電気灌水機の利用で次第に使用されなくなりました。

猪口万右衛門により改良された踏車
筑後の農家ではよく見られた光景です。

木工製品が輸入されていた若津港

宝暦元年（1751）久留米藩は、向島に港を造り若津と命名しました。古い港の榎津に対し、新しい港という意味で、若津としたのでしょう。これより23年遅れ、安永３年（1774）柳川藩も、小保浜口に港を造り、住吉と命名しました。大川には、新旧４つの港町が成立し、筑後川河口の水運の町になっていきます。久留米藩の港町は次第に榎津から若津に移行していきますが、田主丸の林田正助という人が、手津屋の屋号で、若津港に倉庫を造り、海運業を始めています。次第に営業を広げ、大阪にも支店をもち、所有船７艘、従業員、625人という大商人に成長していきます。また手津屋は榎津町の船大工棟梁の伝吾に500石積の船１艘を注文していることもあげておきます。大阪や長崎から26品目の商品を輸入し、久留米藩の許可を受け筑後一円に販売していますが、その中に次のような木工製品があ

明治21年、三潴郡図

ります…。①仏壇諸道具一式、②材木類一式、③箪笥・長持・戸障子・椀家具類・塗物一式、等です。

これは一体、どういうことでしょうか。

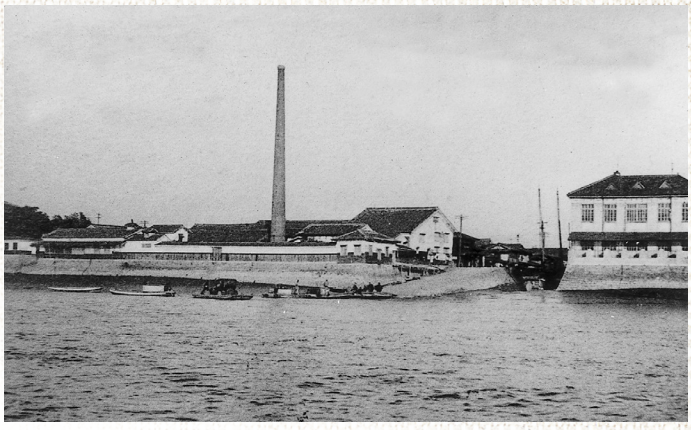
文化８年（1811）という、19世紀になっても、家具・建具・材木類まで大阪方面から輸入しています。

それで、榎津の木工製品の製造は、19世紀までは、船と農具（踏車）が主で、家具類の製造は、注文があれば何でも造っていたようです。というのは、江戸時代の人達は身分によって衣服、家具類の使用まで制限され、現在のように自由に品物を買うことは出来ませんでした。文化３年（1806）の久留米藩の記録に、婚礼の道具として、庄屋⑨で長持一つ、平百姓は、風呂敷つつみを使用とあり、日用品まで種々の制限がありました。

柳川藩も同様です。

当時の人達は、衣類・履物・髪型まで、身分によって制限されていましたので、家具なども、現在のように、自由に買うことは出来ませんでした。また、職業も自由に選ぶことは出来ず、大工職になるのも許可制で、庄屋大庄屋を通して久留米藩の御作事奉行⑩の許可が必要でした。

榎津町　福山長右衛門の名が見える


明治18年新設の若津渡船場（創業明治14年）

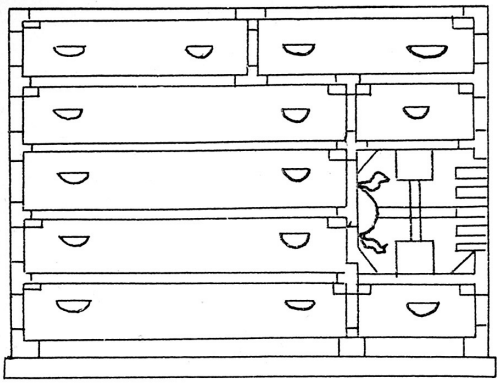
造船・農具製造から指物の産地へ

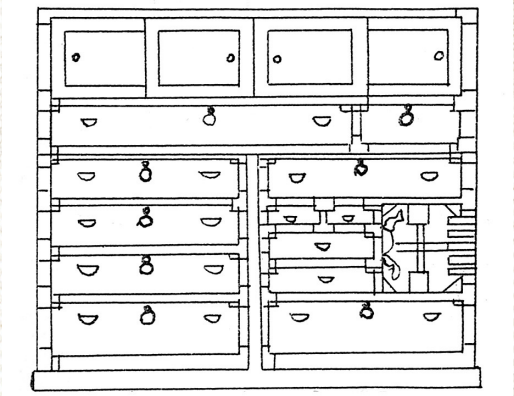
造船や農具（踏車）の製造で、榎津町は、江戸の中期頃から、木工産地の町として知られていましたが、指物製品を造るようになったのはいつ頃からでしょうか？

前記、佐賀の牛津の商家、野田家の日記に嘉永４年（1851）、大桶１本建る、ふた（蓋）榎津ニ頼ム。と書かれていますが、大桶の蓋などは、高度の技術をもつ榎津の木工職でないと造れないということです。それで、指物類は注文さえあれば、いくらでも造ったでしょうか、筑後地方の家具類の使用は、京・大阪・広島などより遅れていたようです。

しかし、文化13年（1816）になると、榎津町より柳川領へ水車、戸障子、戸棚、細工物が移出されています。それから15年後、榎津指物が佐賀領で販売されている記録があります。佐賀藩有田の学者、正司考祺という人の書物の中に、「櫃⑪、戸棚、障子、襖の類、京大阪、広島より来入す。近年榎津より来入」という記事があります。天保初期の作です。

文化、文政、天保と続きますが、榎津指物は、京、大阪、広島産の輸入家具と競争しながら、文化年間から天保にかけて指物産地が成立しているようです。榎津で名工といわれた田ノ上嘉作という人が榎津長町で生まれたのは文化９年（1812）です。




明治前期の榎津タンス（続大川風土記より）

柳川領に榎津産の水車、指物類が移出されている頃、嘉作は未だ４歳でした。
嘉作は、嘉永年間（1848－）柳川の豪商、武末家からタンスの注文を受けています。

地場産業へのあゆみ
明治維新と榎津町

明治４年７月、廃藩置県により、柳川、久留米、三池の３藩は、それぞれ県となりましたが、同４年11月、統合され三潴県になります。

初め県庁は、榎津町に置かれましたが、位置が不便（現向町水天宮一帯）ということで、若津町に移転（若津上町）し、明治５年２月久留米に移転しました。

この頃の榎津町の木工業について、明治７年の三潴県物産誌によりますと、榎津町の戸数700戸の内、大工職の家は96戸、船大工が多い、製品は、水車（踏車）2,000、タンス5,490、障子18,300、長持1,830、雨戸7,320、を挙げていますが、この数値はあまり正確なものと云えません。例えば、明治８年、当時の陸軍の調査では、榎津町の戸数は479戸です。また、物産誌は「榎津町ハ職工（大工職）多数ノ地」と記していますから、すでに、榎津は、明治初期、木工の町となっています。

特に、榎津製の踏車（水車）は、性能がすぐれていたようで、明治14年、東京で開催された第２回内国勧業博覧会に出品した、榎津出来町の福山長右衛門さん製作の踏車が入賞しています。

表１は、明治15年、福岡県の木製品輸出と輸入表ですが、明治15年には、家具類は未だ、広島、大阪から輸入しています。

輸出先は、長崎、熊本となって、榎津指物の販路が拡大しているのが分ります。

明治15年

輸入の部			
品物	数量	代価	地名
箪笥	683	2,211	広島
長持	220	296	広島
襖	2,817	765	広島・大阪
障子	700	138	広島
輸出の部			
品物	数量	代価	地名
箪笥	2,005	8,025	長崎・熊本
長持	700	1,050	〃
襖			
障子	6,940	2,776	長崎・熊本

明治17年

輸出の部			
品物	数量	代価	地名
箪笥	1,455	2,300	長崎
長持	2,200	1,430	長崎
木踏車	1,185	2,350	長崎・佐賀

福岡県勧業年報　5.7回より

しかし、明治の中期頃まで、榎津に問屋⑫（家具店）はなく、不景気や注文がない時は、小物（机、網戸棚）などを車力に積んだり、天秤棒⑬でかついで、佐賀、熊本方面に売り歩いていました。

日清戦争⑭後（明27～28）榎津に島原座という買い寄せの店が出来、天草、島原方面から木炭農産物を積んで、若津港で売り、家具を積んで帰って行ったのが、榎津町での家具店の始まりといわれています。

大川町の成立と家具産地の成立

明治22年３月13日、榎津町と向島村（若津町を含む）、酒見村、小保町が合併し、人口9,455人、戸数1,693戸、町域5.66㎢という小都市が誕生しました。

この大川町の成立とともに、大川～八女を結ぶ国道442号線と佐賀～大牟田を結ぶ国道208号線のルートが設定されました。

また当時、対岸の諸富町に行くには、小保からの渡しでしたが、明治18年に渡船場が若津（現昇開橋横）に移転し、筑後の水陸交通の中心地は、榎津・小保から、若津に移行していきました。

当時、若津港は九州の米の輸出港として、発展し、外国航路の大型船も来航し、銀行、回漕店（船により輸送する店）、米穀商、旅館、料理店、郵便局、警察署などが立ち並び、明治23年には、弥生町という町並が出来ました。

また、明治35年になりますと、若津渡船場から明治橋まで明治町、明治橋から、榎津向町の東側に榎津東町という町並が出来ました。

このような、大川町の町域の拡大とともに大川の木工業も、明治34年になると、家具類商21、材木商12、細工物大工職228戸、職工437人、船大工職89人、木挽職66人、桶職23、鍛冶職21等を数えます。

この中で、家具店、材木商、木挽職の増加は、家具類の取引きが盛んになっていることを表しています。それで、明治34年になると、大川町で初めての製材所が若津の弥生町に設立されました。（山口製材所）

このように、家具の売行きがよくなると、榎津タンスの、デザイン、形も向上し、カラクリと称して抽き出しの奥にかくし物を入れたり、二重の底板の中に貴重品を入れる箇所を造り金具の装飾も細やかな細工が加えられ榎津タンスの質は一段と向上しています。

（和家具研究家　小泉和子氏評）

榎津指物から大川家具へ

明治42年になると、大川町に遅れていた鉄道が敷かれ、電燈、電話の利用が始まっています。明治42年、酒見の中原天満宮前より、現筑後市の羽犬塚駅まで、三潴軌道が開通しました。大正３年、若津～柳川・榎津東町までの三潴軌道の延長工事が完成しました。（注）明治42年榎津～羽犬塚と記した本が多いですがこれは、誤りです。

軌道というのは、道路に路線を敷き輸送を行う鉄道です。よく脱線したそうで、その時は、旅客が客車から降り、全員で押したそうで、この頃はのどかな時代でした。

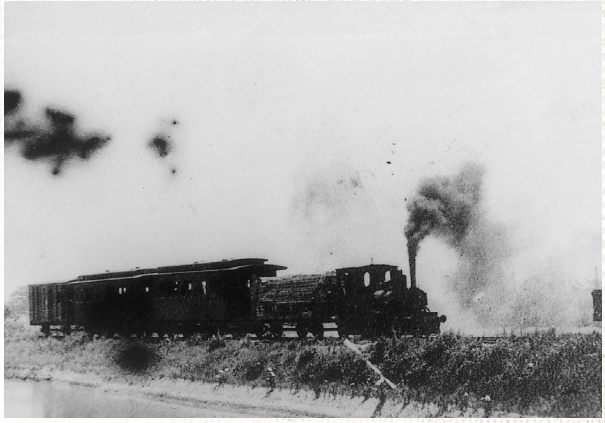
大正元年（1912）には、若津から久留米市の縄手（現久留米駅付近）まで、大川鉄道が開通しました。大正10年には、若津から明治橋近くまで延長しています。

この２つの鉄道の開通によって、大川町は鹿児島本線の久留米・羽犬塚駅と、鉄道で結ばれ、門司や熊本方面への物資の輸送も便利になりました。明治44年の三潴軌道の輸出品目は、１位が木製品（3,455トン）で、輸出先は、①熊本、②筑前（福岡市）③豊前（大分）朝鮮（韓国）まで拡大しています。２位が酒で（2,100トン）３位が莫座で（2,045トン）、莫座の輸出先は、神戸からアメリカ、ドイツとなっています。

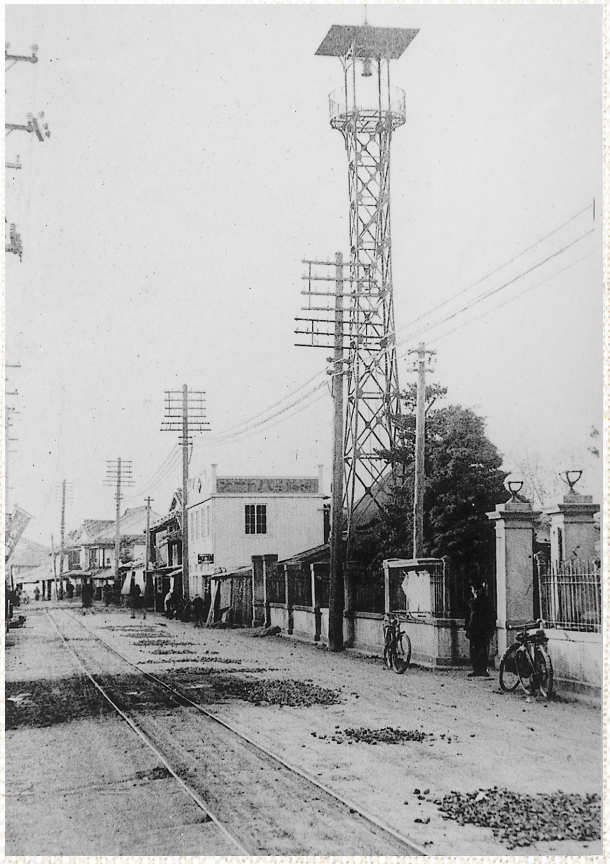
輸入品目は１位が肥料（4,849トン）２位が石炭（4,042トン）３位が木工板（1,891トン）で木材の産地人吉（熊本県）から製材された板として大川町に輸入されています。

明治41年の大川町案内には、このような、電燈、電話、三潴軌道を敷設することにより「榎津指物」の前途は有望である。というような記事が見られますが、ここでこの記事に注目してほしいのは、明治41年になっても、大川町自体が未だ「榎津指物」という名称を使用していることです。

それでは、指物の上に大川と付くのはいつからかといいますと、明治43年１月、大川指物同業組合が結成されてから



大正時代の大川鉄道　若津～久留米
大正10年榎津まで延長



旧若津警察署前　三潴軌道のレールが見える
昭和７年撤去

です。

木工製品の質の向上、組合員の利益の増進を目的として、同業者31名で結成されました。明治33年、重要物産同業組合法が成立してから10年後のことです。（事務所は榎津33番地）

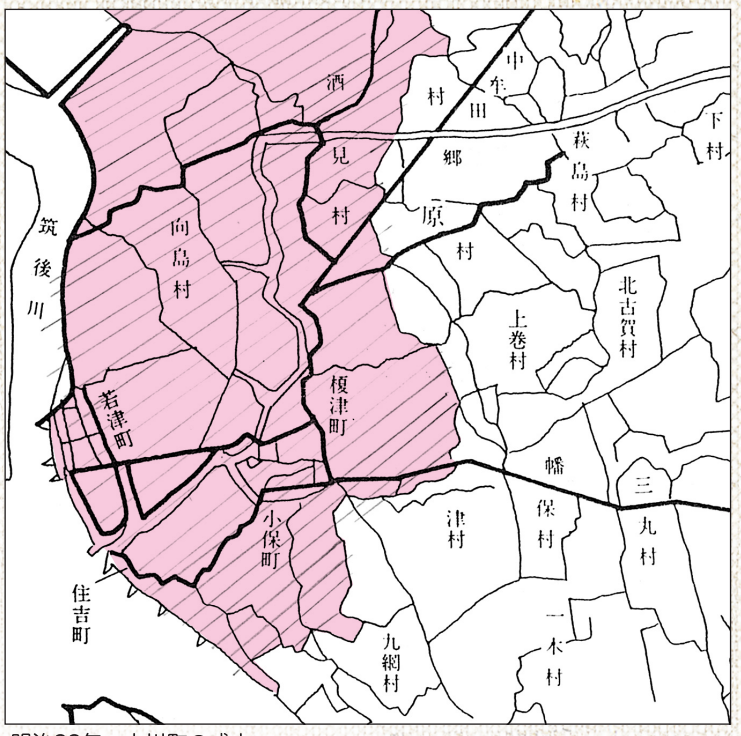
初代組合長に吉原正隆、副組合長に酒見佐平、陣内末造の各氏が当てられています。

また、木工技術の向上を目指して、現大川税務所近くに、工業講習所（修業年限２年）を設立し、木工部の指導者に、埼玉県川越から杉山鉦之助、助手に山浦半蔵、塗装部に静岡市から増田藤吉、劉　武吉（大川）を迎え後継者の育成に力を入れました。

埼玉県の川越から木工指導者を迎えているのは、当時、川越は桐箪笥の産地として有名だったからでしょう。

川越では、“嫁にやるなら川越タンス

いれてやりたやこの振袖を”という有名な作詞家、西条八十の詩が残っています。このような木工業者の努力が実を結び、木工製品の販路も、長崎、島原、天草、肥前（佐賀）肥後（熊本）といった西九州一帯や関西方面にも出荷されるようになりました。

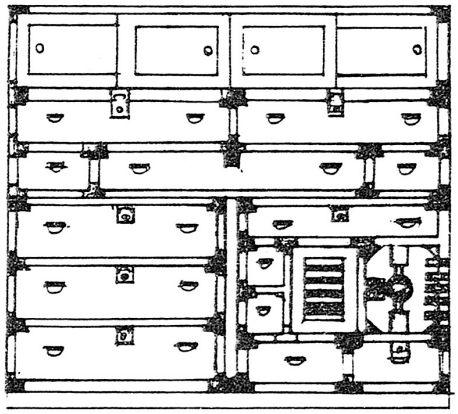


明治22年　大川町の成立

大川指物は、箪笥の金具、塗りも、一段と向上し、デザインも派手になり、花鳥風月の絵画風の螺鈿⑮を取り入れ、全盛期を迎えます。

この頃、大川町の産業に重大な影響を及ぼしたのが、明治35年の長崎本線の開通に続き明治41年の三池港の竣工（工事完成）です。

当時、長崎方面への貨物の輸送や人の往来は、若津港から汽船を利用していたのですが、次第に鉄道輸送に切り替えられていきました。さらに、三池が開港しますと、大型船の来航は、若津より施設が整備された三池へ移行して若津港入港の汽船は減少し、若津町は活気が無くなり、榎津町が興隆していくことになります。


明治中期の榎津タンス（続大川風土記より）

コラム

日田からの筏流し

昭和29年、筑後川の上流夜明に、九州電力の夜明ダムが完成し、昭和27年の12月で、日田からの筏流しは、その永い歴史を閉じました。日田の筏流しは、江戸時代の天和年間（1681～84）、竹田村の相良吉三郎という人が始めたものといわれています。

後年、許可制になり、日田から久留米領内を流すことは、難しかったといわれています。

日田からの筏流しが盛んになったのは、明治になってからのようです。

九重山の麓の玖珠郡やら、熊本の小国から川づたいに日田まで木材を集め、日田の亀山公園の三隈川まで流し、そこで長さ28メートル幅４メートル内外を筏に組みます。これを一枚といい材木数は、80～130本になります。

この一枚を下流の浮羽郡まで流し、これを四枚一組にして、下流の大川の鐘ヶ江、榎津まで流したものです。

大川の人達は、大川木工業の材料と思っている人が多いですが、大川で製材して佐賀柳川方面へ販売していました。

また、沖回しといって、鐘ヶ江には日田から運ばれた筏を、海筏に替え、大牟田や、長崎県の諫早まで運んでいました。鐘ヶ江には、木屋という材木商が３軒ありました。

日田からの筏流し、昭和20年代（花宗川）右側松林材木店

有明海には「澪筋」といって、引き潮の時だけ潟の中に川が出来ます。この澪筋を利用して沖へ行き、満潮に乗って大牟田方面へ上っていったといいます。

明治36年生の、日田の筏師であった、渡辺音吉さんは、日田から榎津に行っていた想い出を、次のように記しています。

“榎津に行くためにやね、大川の若津で川の本流から榎津江湖に入って、これを上って行く…江湖沿いに造っちょる貯木場は、筏を10枚くらい置かるる広さで、そこに筏をずらーっと浮かべちょったが、潮が引いたときには貯木場は干上がってしまう、そんとき、筏が泥に浸かって汚いと思うかも知れんが、いつもは潮水の中に浸かっちょるとなき、木が腐りにくいたい。”そして、こうも記しています。

“榎津と日田は兄弟のようじゃった。あそこの発展と日田の発展は、どちらもなきゃなりたたざった。”と。

この日田からの筏流しの恩恵を一番良く知っていたのは、大川の材木商の方達でした。

日田の亀山公園の日隈神社の古い玉垣は110本ありますが、その内46本は大川の木材業者が奉納しています（明治43年11月３日）

次の方達の名前が見えます。一人で何本も奉納されている方があります。

奉納者名

山口兵次郎、近藤萬造、江頭惣八、大川製材株式会社、下川卯吉、江頭喜久次
江頭梅蔵、熊谷陽次郎、江頭伊三郎、江頭政助、佐藤　茂、渡辺豊次郎、大渕小三郎

製材所の設立と木工機械の利用始まる

大川の木工業で、機械を初めて取り入れていったのは、製材工場から始まっていきます。それ以前は、木挽といって、縦挽用の大きな鋸を手で引いて木材を割いていました。

明治34年の若津弥生町の山口製材所で、電動50馬力、蒸気力による51馬力の丸鋸の設置より始まり、大正10年には五つの工場が出来て、職工数は男76、女４、計80名でした。

大川の製材所は、花宗川河岸に設立されています。木材の輸送は日田から筏流しであり、製材所は500～1,000坪の貯木場が必要ですが、花宗川の河川敷を利用できるという有利な条件がありました。

一般の指物業（木工所）に初めて機械を採用した人は、榎津長町の松本由太郎という人でした。

京都大学工学部教授の花田博士の指導を受け、大正11年に、丸鋸、帯鋸、カッター、手押し鉋、自動角のみを据え付けた工場を完成させました。帯鋸は大型の木材を製材する機械です。

この工場は、大正12年の関東大震災で、東京・横浜が焼野原となり、都市の復興に木工製品の需要が高まりました。

それで、機械を入れる前は、３人であった職人を10人に増員し、職人の日給も50％値上げし、製品の増産に励んだといわれます。

この機械は、現在、向島の村上機械に展示されています。

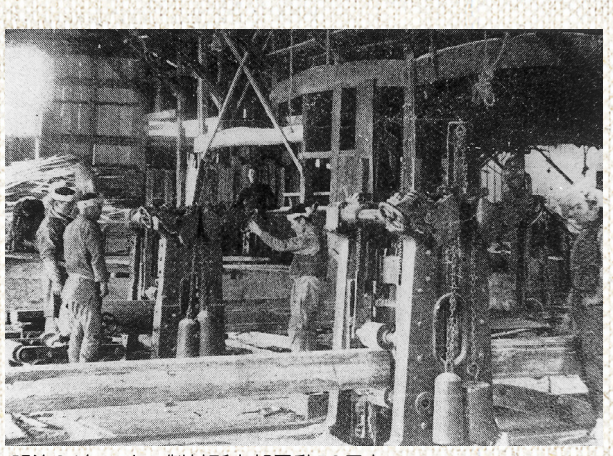
しかし、大正期に始まった木工機械の採用は、一般の小規模な工場には、広がらず、当時わずか２～３の工場だけでした。

昭和４年になると、大正14年創立の大川商工学校の機械実習室に、自動鉋と手押鉋が据え付けられました。

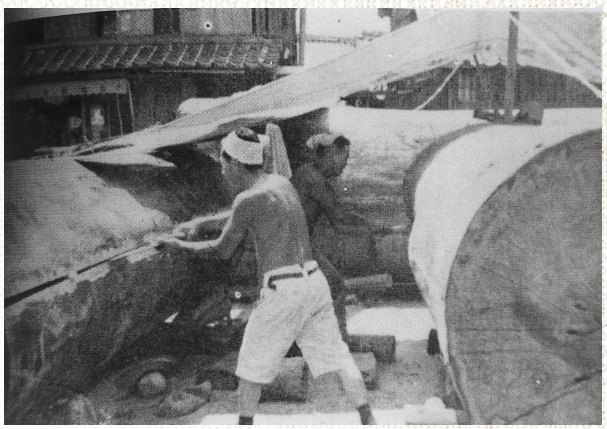
大川に木工機械の製作所が出来たのは、昭和10年になって、明治町に福山鉄工所、榎津の栄町に古賀鉄工所の２工場だけでした。

それは、当時の家具の製造は、①金具製造②白木製造（塗装なしの箱物）③塗装仕上げ、④木挽による製材、という４つの手作業に分れ、機械を設置して、作業場に職人を集める必要がなかったからです。

難しい表現ですが、これを異種的手工業というそうです。家具製造の機械化とともに、大正末期から、昭和初期にかけて、金具製造も機械化され、大阪製の安い金具が流入し、従来、田口地区の上巻や榎津の出来町で、手作業で造っていた金具が、小さく軽やかな物に変わっていきま

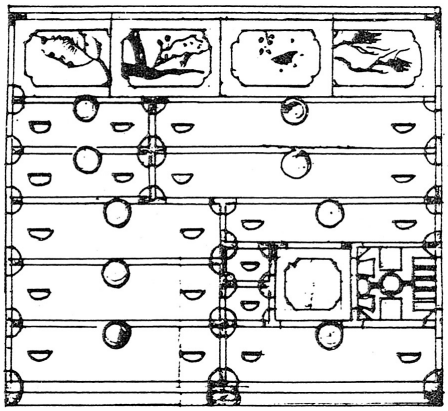


明治34年　山口製材所内部電動50馬力
設置者　山口兵次郎（建築資材用）

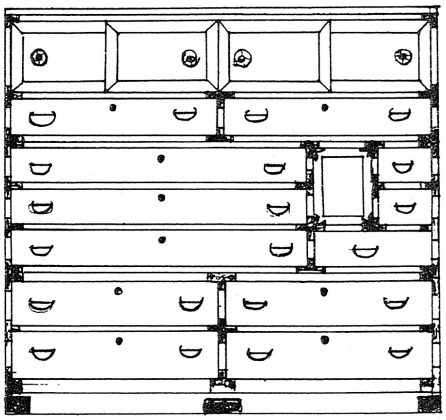


木挽職による作業光景
大鋸という道具で製材する

榎津長町松本タンス店
大正10年代設置された木工機械（村上機械提供）



明治後期の大川タンス
（続大川風土記より）

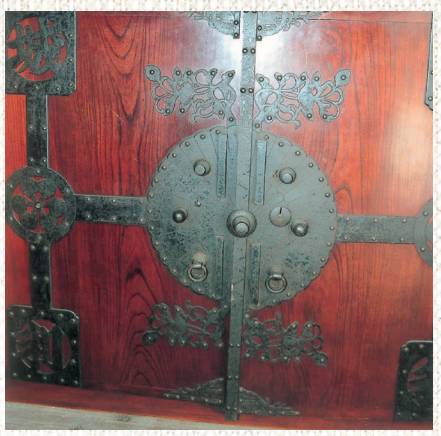


全国のタンスのデザインが一様になっていく
（続大川風土記より）

す。

明治時代の古いタンスは、直径10センチ幅の金具すらあったといいます。

特に、大正12年、関東大震災の復興需要で、官庁や業界が、東京風のタンスを造らせた結果、全国のタンスのデザインが一様になり、榎津という産地が生んだ独特のタンスの形、金具、塗り、デザインの特徴がなくなり、昔から産地の名称であった“榎津”の名がだんだん使用されなくなっていきました。



明治期の榎津タンスの金具
金具職の手作業により作製

重要木工業集団地となり 第一回木工祭が始まる

大正末期から、西九州から関西地方にまで販路が拡大した大川家具は、昭和４年に始まる世界的な大不況で、大川の家具の生産高は大正10年の250万円余りから、昭和６年代には130万円余に落ち込みました。

当時、全国的には４人に１人が失業者といわれていましたが、手に職を持つ大川の大工職の人達は、農村に踏車（水車）の製造に行ったり、当時、進行中の国鉄佐賀線の工事などに参加して、不況を乗り切りました。

昭和８年になると、この大不況も回復し、昭和９年になると、大川指物の組合員の戸数は700戸に達し、従業員数4,000人、生産額は230万円に達しました。

一方、若津港は、港町で、水運と商業の町でしたから、昭和初期からの大不況で、三潴銀行、古賀銀行の倒産とともに、商店街も活気がなくなり、大川の産業の中心は、榎津・酒見を中心とした木工業に移行していくことになります。

この頃、昭和４年から始まっていた、国鉄佐賀線の工事が、昭和10年に完成し、待望の佐賀線が開通しました。現在、筑後川昇開橋と、いっているのは、大川と諸富を結ぶ鉄橋のことで、全長507.2メートル、大型船が通る時は、中央の24.2メートルの鉄橋を23メートル持ち上げる仕組になっています。

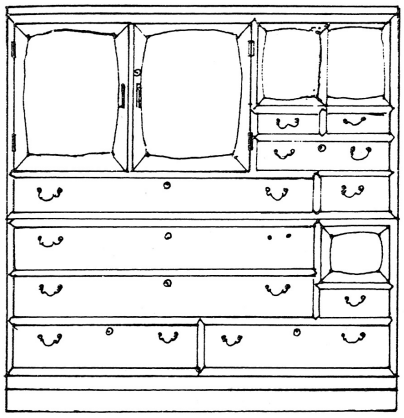
昇開橋を運行中の佐賀線車両　昭和62年廃止

開通後、長崎本線佐賀駅～鹿児島本線瀬高駅を１日30本～40本で結び、大川町は、九州一円の鉄道網と結ばれることになりました。

開通２年前には、小保に筑後大川駅が設置されますと、日本通運株式会社が進出し、木工所から、家具製品は馬車に積まれ、大川駅に運ばれていました。

当時、大川で製造されていた家具は、昭和９年の統計では、和家具13品目（タンス、戸棚、夜具入など）、洋家具（洋服タンス、応接台、テーブルなど）９品目、建具12品目、農具３品目、雑、８品目、なんと計45品目の家具類を製造しています。

この頃、榎津向町、長町には、大きな家具店の前には「大売出し」の字が染められた幟が風にゆらいでいました。



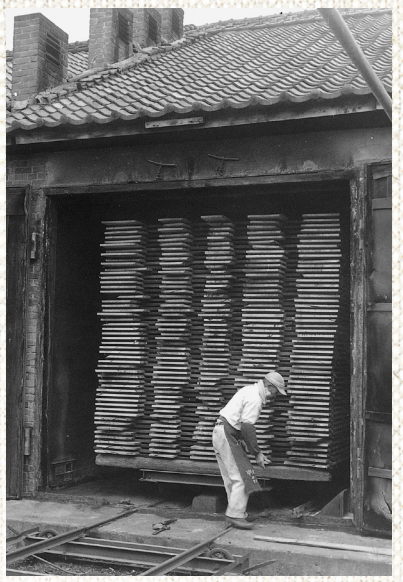
昭和５・６年流行素木桐箪笥（続大川風土記より）

大川小学校で開催されていた頃の木工祭

しかし、昭和12年から始まる日華事変⑯から昭和16年の太平洋戦争の始まりで、日本の経済は、戦争目的のため統制経済へ移行、家具の材料である木材も統制され、自由に手に入れなくなり、若い職人の方達も戦地へ出兵し、人手不足などで、木工場は、軍需品の部品を製造する軍需工場になっていました。

昭和20年８月15日、日本の敗戦で太平洋戦争は終わりました。当時、福岡市、大牟田市、久留米市も空襲を受け、日本の主要都市は、焼野原にバラック建⑰という悲惨な生活が続き都市の復興には、木工製品が必要となります。

木材天日干し作業


昭和25年設立木材乾燥工場

また、当時の日本の重要なエネルギー資源は石炭でしたから、石炭の増産が国家目標となりました。それで、大牟田や田川といった産炭地の住宅、家具建具の需要で、大川町の家具製品は、造っては売れるという木工ブームが到来しました。それで住居と直結した小規模な木工所が、大川町以外の、木室、田口、川口、三又地区に設立され、木工集団地が成立しました。また、昭和22年には、福岡県立大川工業高等学校も設立され、木材工芸科、建築科の２つの学科がありました。

昭和24年になると、北海道旭川、群馬県高崎、東京（荒川西区）、新潟県加茂、和歌山とともに、国から重要木工集団地に指定され第一回木工祭が大川小学校で開催されました。

このように、木工という同一業種の工場が集団で形成されている所を、地場産業の町といいます。

しかし、当時の木工場は、親方（工場主）と職人、弟子（徒弟）と家族労働が主でほとんどの工場は従業員４人以下の親方制家内工業でした。また、一人前の職人になるには５～６年の厳しい修行年限が必要とされていました。

木工機械の採用と機械制工場の設立

昭和20年以前、木工機械を設置していた工場は、大川町では数軒であったといわれますが、木工製品の需要の増大に応じて、カッター（切る道具）、手押鉋、自動鉋、角ノミという初歩の木工機械が、工場に据え付けられていきました。昔からの切り、割く、穴あけ、削るという木工の基礎的な作業を、手作業から電力に替えられた訳です。また、昭和25年には木材乾燥工場も設立され、木材の加工が容易になりました。

この四つの機械を木工一式と呼んでいました。一式機械を採用すると、タンス１本２～３日、大型は、５日かかっていたのが１～３日で完成するようになりました。

この一式機械の外に、ダブテルやルーター⑱（歯車による切削機）などの機械が使用されていきます。

ダブテルのダブというのは、英語のドーブ鳩のことで、テルはテイル尾で、鳩の尾の意味です。これを蟻といいます。二枚の板の直角接着は、釘で打ち付けていましたが、体裁が悪く、見映えがしないので、板に鳩の尾型の凸凹を造り、両方の板を組み合わせる蟻組の機械のことです。

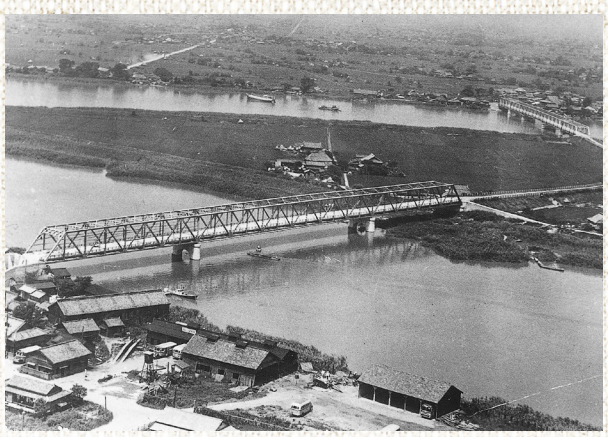
手作業では、時間がかかりますが、ダブテル機械を使用しますと、一日分の手作業が、10分で完成したそうです。

このすばらしい機械を考案した人は、向島の青柳産業の青柳兄二（旧制久留工業専門学校卒）という人で、小保の浜岡鉄工所が製造したそうです。ある研究書には、明治町の福山木工機械製作所と記してありますが、まちがいのようです。この機械はすでに、大阪、広島等では使用されていましたが、青柳産業で考案されたものは、広島、大阪のものより安価で小工場に適したものでした。

こうなりますと一人前の家具職人になるには、長い修行期間を必要とした徒弟制度がなくなり、小工場で家具の製造を見習うという見習い制度（３年程度）に移行し、八女、佐賀、熊本方面から多くの青少年が夢を抱いて、大

川の木工所に就職し、一人前の職人となり、木工業の経営者になる人が出てきました。

日本有数の木製家具産地の成立 筑後川河口


開通時の大川・諸富橋　昭和30年９月

昭和27年になると、未だ榎津もんと影口をたたかれていた大川家具は、元熊本産業試験場長、河内　諒というクラフトデザイナー（工芸デザイナー）の指導によって、引手なしフラッシュ構造という、人目を驚かすような都会的なタンスが誕生しました。

このタンスが郷原の光木工で製作され、昭和30年５月、大阪の西日本物産展に出品され最高賞の栄誉に輝きました。

さらに５月、東京の東急百貨店で開催された、第一回全国優良家具展に出品された大川の五つのタンスのデザイン、技術が高く評価され、全国から注文が相次ぎ、大川家具は「大川調」という名で呼ばれるようになります。

昭和29年には、大川町、三又村、大野島村、田口村、川口村、木室村の一町五ヶ村が合併し、人口4,934人の大川市が誕生しました。

この市制施行と同時に、大川橋と国道208号線が開通し、昭和38年３月大川家具工業組合が設立され、理事長に山浦徳衛氏、副理事長に貞包武雄氏が選ばれました。昭和35年頃からの日本経済の高度成長が続き、大川家具は、東京、大阪の大都市へ進出し、“家具の街大川”として全国的に知られるようになりました。

河内諒先生記念碑の除幕式
昭和33年永眠　昭和35年大川給食センター
現産業会館前に位置

それで、大川市の各地に従業員40人以上という機械制の木工場が設立されていきました。

家具製品の量産化が出来るようになったのは図のように、加工技術の変化です。

ダボ工法とフラッシュ構造の材の採用です。

板と板の接合を、従来は職人の手によるホゾ工法⑲に替り、ダボ工法が採用されていきます。

両方の板に穴をあけ、５～８ミリの丸棒（ダボという）をさし込み、接着剤で加工する技術です。フラッシュ工法は、一枚板から、内部に格子組か芯材を入れ合板⑳を貼りつけた板を造り、早く、安く、家具が造れるようになりました。

また、天然のツキ板㉑からプリント化粧板の美しい合板や、高度の塗装機械も採用されていきました。

昭和46年には、全国的にも最大の大川産業会館が落成し、木工祭や、季節に応じて各種の展示会が開催されるようになりました。

昭和５４年になると、製造事業所1,362、従業者12,104人、生産額1千億を越える全国一の木工業都市に成長していきます。

また、昭和48年の新田大橋、同56年の

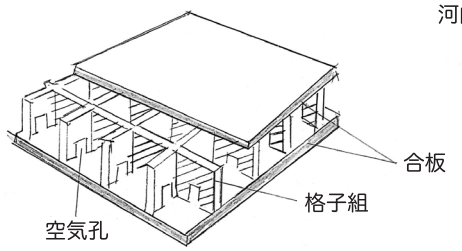
大川家具卸商組合による婚礼家具の宣伝
榎津長町通りを行く花嫁行列　昭和30年代

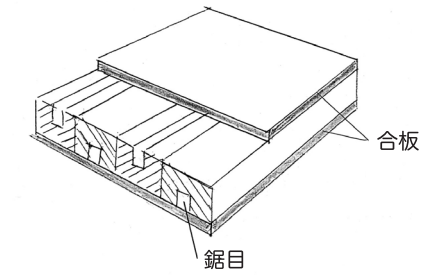
鐘ヶ江大橋の架設で、木工場は、周辺の農村部へ進出し、筑後川河口に日本有数の家具産地が成立しました。大川家具と諸富家具を合わせますと、日本最大の木製家具産地といえます。

しかし、全国の家具産地の生産額は、平成２年をピークに、急速な減少傾向にあります。これは、中国や東南アジアからの輸入品の増加、不況による売れ行きの不振、生活様式の変化、婚礼家具（和タンス、洋服タンス、下駄箱、夜具入れ、食器棚など）の減少、木製家具に替る代替品の増加、低価格品の増加などが挙げられています。

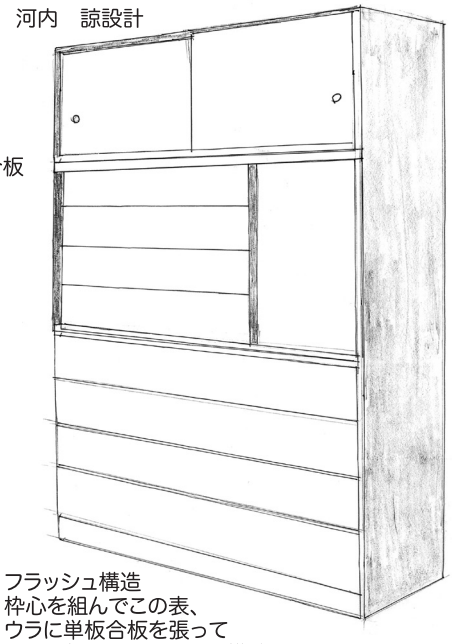
このような家具産業の不振を打開するため大川家具産業は、積極的な海外進出、新製品の開発として、医療、福祉家具の研究、デザイン力のアップ、インターネット販売の拡大など、種々な企画が進行しています。

また、伝統的な家具の技法と職人の育成を目指して、大川市は平成19年から、優れた木工職人を顕彰するため、大川の匠を認定する制度も実施され、現在５人の方が、大川の匠に認定されています。

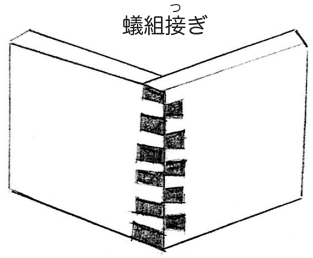




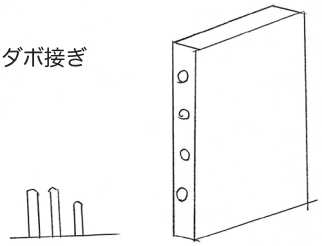
（昭和50年九州経済自書より作図）



フラッシュ構造
枠心を組んでこの表、
ウラに単板合板を張って
平らな板面になっている構造しくみ



先端が広がって鳩の尾のようになっているものを蟻といいます。ダブテルという機械で作成します。



５～８ミリの丸棒をダボといいます。強力な接着剤をつけ、板の穴に差し込み作成します。

大川の伝統工芸品

最近の大川の木工業製品は、機械化された工場の中で、大量生産になっています。

しかし、今もなお、伝統の技術を使用した職人芸で、伝統的工芸品が製作されています。

伝統的工芸品とは、経済産業大臣（国指定）や都道府県が指定したもので、次のような特徴があるものです。

1、主として日常生活に用いられるもの。
2、製造の主要部分が手工業的であること。
3、伝統的技法と技術によって製造されたもの。
4、伝統的に使用されてきた材料。
5、一定の地域で使用されてきた材料を使用しているもの。の五点です。

福岡県では、国指定の伝統的工芸品として、小石原焼、上野焼、八女福島

大川総桐タンス

「書院欄間　高砂」（明治中期　作／黒田多吉）

仏壇、博多人形、八女提灯、久留米絣、博多織が指定されています。

大川市では、福岡県特産工芸品（昭和61年指定）として、大川総桐タンス、大川彫刻、大川組子、掛川、柳川神棚（大川も含む）が指定されています。

大川総桐タンス

桐は湿気を呼ばない、燃えにくい、木目もきれい。ということで衣類の収納に適していることから、桐タンスは昔から高級品として愛好されてきました。

前板に桐材を使用したものを前桐タンス、前板、崖板、天井板に桐材を使用したものを三方桐タンス。

四方桐タンス、前板、崖板、天井板、壁板に桐を使用したもの。

総桐タンス、内外ともに全部桐材を使用したもので、最高級品で価格も高い。

大川彫刻（昭和61年指定）

彫刻というのは、木、石、金具、金属などに文字や模様を刻むこと、仏像などをほりきざむ木工技術のことです。高い技術が必要で、筑後地方の社寺建築や上級武士、大町人の住宅の欄間などが榎津や小保の秀れた技術を有する人達に注文がきて、製作していました。

明治になると、木造住宅の品格を高める装飾として、彫刻欄間が取り入れられ、通気、採光も兼ねたものとして使用されていきました。

大川組子（昭和62年指定）

一定の枠の中に調和の取れた図柄を組子部分で設計する、200以上もある組方から、デザインに合う技法を選んで、骨と呼ばれる細い板を作って割込む技法で組子部分を設計します。職人の勘と技法で作業を進めていきます。組み方はいろいろな正多角形を使用しますが、正三角形が基本で、切り込みを入れた骨を一本一本たん念に合わせていきます。

掛川（昭和54年指定）

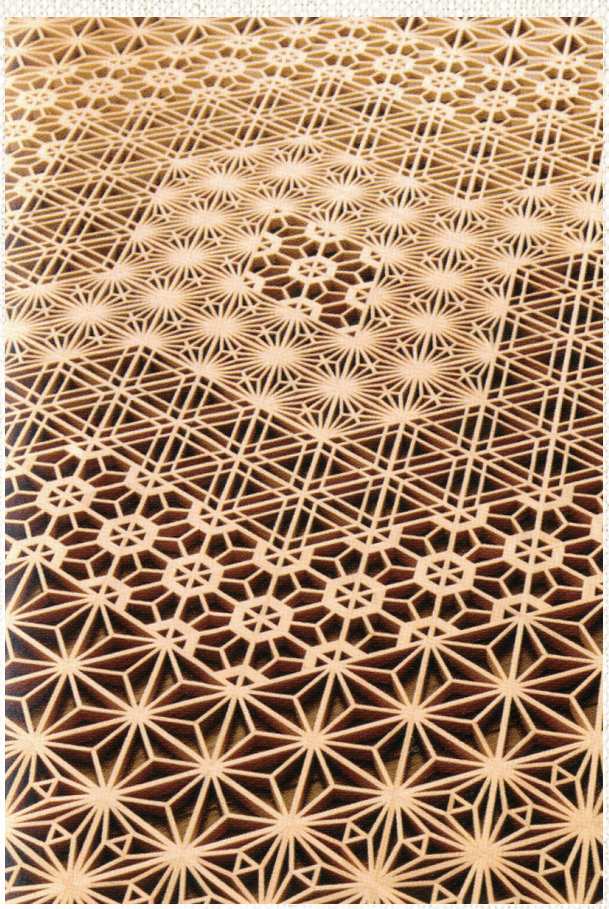
筑後花ゴザの中で、最高級品、様々に染色したイ草を用いて織った美しい敷物で盆ゴザ、御前ゴザともいう。筑後地方では仏前に使用する。その外２枚綴りにして一坪の広さにして応接間の敷物などにも利用されている。

掛川の名称については、様々な説があり、はっきりしていません。

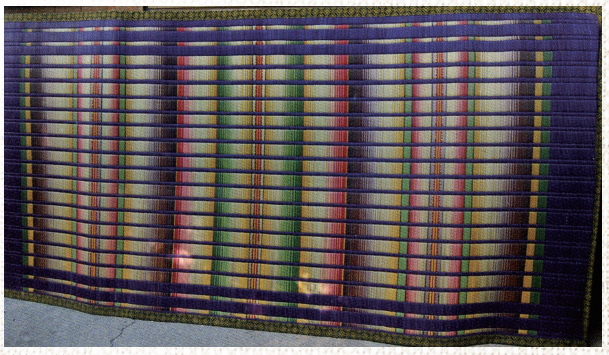
昔は高度の技術を要する手織でしたが、現在では機械織になっています。

柳川神棚（昭和56年指定）

昔は榎津の長町で製造されていましたが、製造地が柳川に移り、現在では、柳川神棚の名称になっています。神棚にも種々あって、伊勢型、出雲型、太宰府型の３種があるそうですが柳川神棚は全国でもめずらしい太宰府型です。



大川組子



掛川織

柳川神棚

①集散地
生産地から産物を集めて、これを地方などに送り出す地。
②江湖
有明海の海水が流入してる小河川や入江、花宗川（榎津江湖、川口地区三条野の江湖、三又地区新橋の江湖）など
③肥後街道
久留米城下より大善寺、城島を経由して酒見より榎津を経て柳川城下より三池から熊本県の境界櫟野へ至る道路
④福島住還
榎津より酒見郷原下牟田、柳川市の金納から筑後市の水田、八女市の福島町に至る道路
⑤馬継所
宿場で馬を乗り替えるための施設
⑥天領
江戸幕府が直接治めた領地
⑦艀船
陸と停泊している本船の間を人や貨物を乗せて運ぶ小船
⑧絵馬堂
社寺などで奉納の絵馬をかかげておく建物、絵馬は絵の額
⑨庄屋
江戸時代の村役の長　納税額や水利、入会地の管理など農民一般の管理を行なう関西関東では名主という
⑩御作事奉行
藩の建築工事いっさいを支配する役所の長
⑪櫃
大型の箱の類、上に向かって蓋の開くもの
⑫問屋
生産者から商品を仕入れ小売商に卸売りする店や人
⑬天秤棒
両端に荷をかけ中央を肩に当ててになう棒
⑭日清戦争
明治27（1894）明治28（～95）日本と清国との間に行なわれた戦争
朝鮮の農民戦争をきっかけに日本と清の軍隊が出兵して戦争となる日本の勝利で講和が結ばれた
⑮螺鈿
おうむ貝、夜光貝、あわび貝などの真珠光を発する部分を取って薄い片にし種々の形に切って漆器あるいは木地にはめ込み飾りとした
⑯日華事変
日中戦争のこと、日本側はアメリカとの貿易が禁止されないため戦争と呼ばずあくまでも事変と呼んだもの
⑰バラック建
粗末な仮小屋
⑱ルーター
高速で回転する先端の刃を手で移動し部材を切り削る機械
⑲ホゾ工法
木材同士を接合するための突起（ホゾ）を作り、他方の材に穴を作りさし込む
⑳合板
薄く削った薄板を木目が互いに直交するように接着剤で張り合わせた板
㉑ツキ板
木目の美しい材を板面にそって削いで薄板にしたもの
またそれを表面に張った化粧板